妊娠中の服用　量抑え慎重に

Q 二十九歳、女性。子宮内膜症を桂枝茯苓丸（けいしぶくりょうがん）と大黄甘草湯（だいおうかんぞうとう）という漢方薬で治してもらい、無事妊娠できました。妊娠中も継続してよいでしょうか。

A 子宮内膜症にも種々の漢方薬が使われ、桂枝茯苓丸は代表的処方のひとつだが、一般には妊娠中は使用しないほうがよいとされる。桂枝茯苓丸には「異物」を排除する作用があるため、流産の危険が増すと考えられているからである。

また、妊婦は便秘になりやすいが、便秘改善に頻用される大黄を含む処方も、妊娠中は過量にならないようにすべきである。安胎薬（あんたいやく）といって流産予防効果があるとされる当帰芍薬散（とうきしゃくやくさん）を基礎にした薬に切り替えるとよい。

妊娠中の漢方薬の服用については、一般に次のように指導している。

まず器官形成期といわれる六週から一一週までは漢方薬も控えるのが望ましい。

妊娠中は過度の発汗剤や瀉下（しゃげ）剤、利尿剤など強い作用の漢方薬を過量には使用しない。また微小循環促進剤とされる大黄・附子（ぶし）・桃仁（とうにん）・牡丹皮（ぼたんぴ）・牛膝（ごしつ）などを含む処方は注意して使う。

妊娠後期には便秘になりやすく、下剤として大黄を使ってよいか、よく聞かれる。大黄を含む処方でも作用がマイルドな潤腸湯（じゅんちょうとう）などが勧められる。